臨時號

日蓮聖人降誕七百年

日蓮聖人降誕七百年

大僧正　本多日生

目次

一、降誕の因緣
　イ　序言
　ロ　如來の化導を助けん爲め
　ハ　我國の文化を大成せん爲め
二、敎化の中心
　イ　法華經の敎義
　ロ　我國文化の正統
三、門下の覺醒
　イ　氣宇の局量
　ロ　敎義の紛亂
　ハ　信仰の低劣
四、門下の運動
　イ　信仰覺醒運動
　ロ　思想善導運動
　ハ　相互の聯絡運動
　ニ　記念事業
五、統一團の覺悟

一、降誕の因緣

イ 序言

佛教の思想から申しますれば、何人がこの世の中に生れて來るにも、種々の因緣關係を有するので、決して偶然に意義なく生れた者は一人も無い。尤も佛教に敎ふる因緣の思想は、總てを過去の原因に歸するのではない、「緣」といふ字は變化を意味するのであつて、恰かも水晶の球が、太陽の緣を借りれば火を發し、月の緣を借りれば水を發するが如きものである、この緣に依つて種々な變化を來すのであるから、總てを前世の所業に歸することは致さないのであるが、併し主なる力は前世からの原因に基くを知り、そこに深い意味を認めるのであります。それ故に釋迦如來が人生に御降誕に相成つたことの如きは、最も大きな深い意味を有つて居り、決して偶然に印度にあれだけの人が生れたといふ譯ではないのであります。又日本の國が世界の中に存在をして居る、古き昔に此の如き國が存在をしたといふ事は、これ亦深い大きな因緣の存することであつて、釋尊の出現といひ、日本の建國といふやうな大事實は、俱に深遠微妙な意義のあることと信ずるのであります。

それで日蓮聖人が降誕せられた因緣は何處にあるかと申しますれば、釋尊の出現と日本の建國との二つの大きな因緣を承繼いで、それを成し遂げる爲めに出現せられたのである。即ち日蓮聖人降誕の因緣は、一は如來の化導を助けん爲め、一は我國の文化を大成せん爲めといふ、この二つの大きな因緣を以ての故

に、我が日東帝國にお生れ遊ばされたのであります。

ロ 如來の化導を助けん爲め

釋迦如來が世に出られた因緣は、法華經の壽量品に於て說明せられたのが最も正しくもあり、意味も深いと思ひますが、それに基いて見ますると、久遠常住の如來が我が娑婆世界の衆生を濟度せんが爲めに茲に印度の迦毘羅衞城に降誕せられたのである。その衆生濟度といふことは、唯だ釋迦在世の印度の人に限つて居るのではなくして、時は人類の在らむ限り後々までも含んで居るし、處は少く見ても現在の地球上の全體にその敎化を及ぼさう、即ち一閻浮提の中の一切衆生に永遠に救ひを與へやうといふ大きな目的であつたのであります。それ故に釋迦在世の時には五十餘年の大敎化を與へて、法華經に至つて總て濟度の目的を達し終つたのである、即ち涅槃經に仰せられてありますが「一度すべき者は度し終り、說くべきことは說き終り、この世に出現したる目的を成就し終つたが故に、今我は心靜かに涅槃の床に入るのである」といふ事を申されて居るのである。それ故に釋迦は在世に於ては、豫想せられた通りの敎を說き終り、濟度すべき者を殘らず救ひ終つて、滿足の笑みを含んで入滅をせられた、けれどもその釋迦入滅以後の永遠に於ての人達、又釋尊に値ふことの出來ない廣く地球上に亘つての人達を救ふ爲めには、その敎を後々に傳へ、それを全世界に普及せしめて、その敎化の目的を達しなければならぬといふが、釋尊涅槃の夕にもお考の中に殘る事であります。それ故に釋尊の敎の中には「付法藏」と言つて、釋迦の敎を付囑して後に傳へるといふ事が、非常な重い意味を有つて居り、大抵の御經には流通段と申して、その敎が

後に弘つて行く事に關してのことが詳しく說かれて居るので、現に法華經の如きは第十七の分別功德品より第二十八の囑累品に至る迄の十二品といふものは、流通の事に關しての說法である、又廻つて見れば法師品、寶塔品、提婆品、勸持品、安樂行品、涌出品、これ皆その敎を後に弘める目的に關しての敎訓である。それ程に我が敎を入滅以後に及ぼさうといふ考が强く釋尊の胸にはあつたことであります。それ故に後に法を弘める人達を撰んで置きになつて、殊に本懷の敎を留めた法華經は、その付囑に關して熱心なる宣示が擧つて居る、神力品に於て第一の高弟上行菩薩に之を付囑せられた、その付囑の趣意は唯今述べ來つた如くに、如來が世に出現したる目的を成就せんが爲めである。

釋尊の未來を達觀せられた所にては、如來の敎が一時は紛亂をして、方便の敎に依つて眞實の敎を忘れる、枝葉に流れて根本を忘れるといふやうな間違ひを起して、佛敎が敎化の目的を全うする事が出來なくなる時がある、さうなつては如何にも殘念な事で、如來が世に出でた目的を失ふのみでなくして一切衆生は救はるべき途が塞がる譯であるからして、是非ともこの如來の敎を正しい意味に於て復活をして、さうして一切衆生敎化の目的を成就しなければならぬといふ事に依つて、上行菩薩に付囑の事が起つたのであります、その委託を受けたる上行菩薩が時を圖つて我國に生れられたのが日蓮聖人であります、これはモウ今更多く論ずる必要も無い程明かな事になつて居る。多くの宗敎界の偉人には、信仰の上からして或は菩薩の生れ代りだとか、神樣の生れ代りだとか、神がのり移つたといふやうな、迷信に等しい話は數限りなくありますけれども、それとは趣きを異にして居るので、日蓮聖人が上行の再誕だといふ事は聖人自らも證明せられたが如くに法華經の豫言に對して一々それを身に實行せられたのであります、而してその豫言といふも簡單な事ではないので、第一時が釋迦滅後二千年より二千五百年の間に出現するといふことも、法華經には明記せられて居るのであります、これが丁度日蓮聖人の降誕は佛滅後二千百七十一年に當つてお生れになつたのであり、又その上行の出現に就て反對が起つて斯く〳〵の事がある、或は頭の座に据へられ、流し者になり、種々なる所の迫害が起るといふやうな豫言も、洵に鮮かに日蓮聖人の御身の上には經驗せられたのであつて、法華經の豫言を一字一句も殘らず日蓮聖人は之を體驗せられて居るのであります、それ故に日蓮聖人が上行の再身だといふことは、唯の奇蹟といふか、神秘といふだけではないので、如何にも鮮かに法華經の未來記と日蓮聖人の一代の實行との上に證明せられて居るのであります。

斯の如く日蓮聖人が上行の出現だといふ事は、これはモウ問題とする必要はありませぬが、その上行菩薩が出現した目的の事業といふものは、即ち法華經の神力品に於て委託せられた如來の化導を助ける事に存するのであります、この降誕七百年に就いて特に注意しなければならぬのは、日蓮聖人の高德を力說するが爲めに日蓮聖人の出現された本領を履き違へるやうな事があつては、寔に相濟まぬことと思ふ、唯だ日蓮聖人を偉人として紹介したり、或は日蓮聖人を宗敎の絕對の對象として、日蓮崇拜の信仰に趨つたり、さういふ風な意味に於て之を鼓吹するならば、大聖人は靈山會上に於て非常に御嘆きなさることゝ思ふ、如來の化導を助ける爲めに聖人は出現せられて居るのである。その意味は日蓮聖人の御遺文を以て證明すれば如何にも鮮かな事で、『如說修行鈔』には『佛勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不幸なれ』と仰せられ、又開目鈔には法華經の行者を以て任ぜられて居るので、その法華經の行者といふ意味合は、無

論釋尊を戴き釋尊の教に遵つて、それをその通りに實行をして行くといふ意味で、自分が宗教の絶對の本尊になるとか、信仰の對象になるといふ意味てはないのてある、法華經の教を遵奉して、如何なる迫害の中にもそれを貫き通すが法華行者てある。それ故に如來の化導を助ける目的に依つて日蓮聖人はこの世に出られたのてある。

この化導といふ事はどういふ意味てあるかと言へば、佛教は擴げれば樣々の意味を有つて居るけれども根本の思想は一切衆生の心の闇を除いて、所謂精神的の救濟を全うするにありと思ふのてある。精神的の救濟とは、人は樣々なる煩悶を懷いて居るものてある、物質の方面に於てどれ程滿足の境界に置かれても、精神の方面に於て苦悶が起るのてある、それは物質の方面にも種々なる缺陷があるからてあつて、如何に滿足と言つた所が、人間には「四苦八苦」と佛が叫んだ通り、第一生死を免かれ得ない、生命が亡くなる、病氣に罹かる年を老る、又中々自分の思ふやうに物事がなるものてはない、殊に人間は出來ないやうな事を望んて、進んて行く性質を帶びて居るが故に、一を得て二を望むといふ所に人間の向上もあるのてあるが、その代りに其處に又それを成就する事が出來ない時煩悶を懷いて苦むのてある。それてあるから精神の修養を加へれば、煩悶も向上の階段となる譯てあるけれども、修養を除つてしまへばそれがその人の苦悶となつて殘つて行くのてありますこと故に、第一の精神的救濟は、人々の精神の底の苦しみ。毒矢の折れ込んて居るその矢尻を拔き取る事が衆生教化の根本目的てあらうと思ひます、社會の狀勢が如何に變化しませうとも、文明の形式が如何に變化しませうとも、人間が永遠に救はれるといふことの根本義は、唯今申す精神の奥底に打込まれたるこの苦惱を除くことてあらう。モウ一つは人間に固有して居る所の罪惡性てありまして、或は物慾とも云ひ、煩惱とも言ひ、劣等なる性情とも言つて居りますが、人間はどうしても半面に左樣なるものを有つて居るからして、それを淨め、それを正しうして行くといふ所の國化は永遠に無くてはならぬのてある。所がその事が又容易ならぬ事てあつて、先帝の御製にも、

ともすればかき濁しけり山水の
すませばすます人の心を

といふのがありますが、少し油斷をすれば直ぐに濁つて來るものてある、その精神の罪惡性を矯め直して正しきを履んて悔ひざる生活に導いて行く事が衆生教化の目的てあらうと思ふ。故に日蓮聖人の世に出られたる第一の目的は、廣く一切衆生をして如來の教の下に來つて、精神の苦惱と精神の罪とを除き去つて、そこに精神的なる幸福、精神的なる善根を植えしひるやうに、總ての人々が境遇の如何を問はずして、人生の幸福を精神的に深く味ひ、精神的に善根を積む事を喜んて行く生活に入り、「まことに結構な一生を送りました」と言つて、喜び笑つて死に得るだけに、人類の全部を救ひ終る事が、大聖人出現の目的てあると思ひます。

ハ　我國の文化を大成せん爲め

今一つは我國の文化を大成せん爲めてあつて、これは何れの國にも文化は大事だと申せば同じ樣てありますけれども我國の文化に就ては一種特別な意味を有つと思ふのてあります。それは日本人の天職に鑑みて、日本の國が果すべき仕事は何かと言へば、この精神的の文化を以て世界の人々を救ひ導くといふ

ことにあると思ふのである、恰も日本の國それ自身が神樣の考への如く、佛樣の考への如く宗教家が考へて居るやうな清き目的が、實は日本の國家が有つて居る目的であらうと思ふのである、國家それ自身が神であり、佛であり、宗教的であるのが日本の本領であると私は思ふ。その事は何を以て證明するかと言へば、これ亦我が建國史に於て頗る明白なる事實で、第一我國は神がお開きになつて居る事に於て、神のお考へが國の理想に映つて居るのである、さうして神の仰しやる事が「皇祖皇宗の遺訓」と稱せられて、歴代天皇の眷々服膺し給ふ所であつて、その神の遺訓を國民も亦同じく眷々服膺して行くのであるそれ故に日本の國家が有つて居る理想は神の考へであつて、國それ自身が神と等しい所の清き觀念に依つて立つて居る所の國家である。

さうすると神の考へはどこにあるかといふと、「天業を恢弘し天下を光宅する」と言はれて居るが、天業といへば世界の人々をして各々その處を得せしめて、さうして光と宅とを與へるのが即ち天業である。光を與へるといふ事は前に申した如來化導の目的と相似たものであつて、人々の心の闇を除く事でなくてはならない、唯だ日本の國が武力に於て强い、經濟力に於て進んで居るといふのて、他の國を威壓せんとするならば、それは古い考へであつて、他からの蹂躙に委することは出來ぬけれども、日本の國が世界に與ふる光は武力でもなければ經濟力でもなくして、則ち精神的なる日本の文化であらねばならぬ。所謂世界の人々の思想を善導して行くので、今日は誤つた觀念に陷つて互ひに相反噬して居る——例へば勞働問題の如きでも、世界は非常な失敗を辿つて居る、殆ど何れの國もその解決に就ては適當なる考案を發見し得ない。又民衆運動にしても、今日は一概にそれが進歩のやうに看做して居るけれども、その趨る所は共

倒れになるやうな事が多いやうに思ふ、互ひに爭ひを助長し、自己の權利と利益を擴大する事を以て進歩と考へて居る故、其處には衝突があり、權利を得たる者は却つて一層激しい壓制をするやうな事に相成つて、即ち露西亞の如く、民衆的政治と言つても專制治下の壓制よりは餘程ひどいことは、今日は事實が物語つて居るのである。他の國はそこ迄行かぬやうてあるが、やはり國内にムク〳〵して居る所の民衆運動の勢力は、一歩誤れば同じ徑路を辿るものであらう。日本の勞働運動でも、昨今東京の或る工場に於て破壞運動をやつて居るのを見るすれば非常な亂暴なやり方で、工場を破壞し、機械を破壞し、事務員を亂打して居るやうな譯で、左樣な事は善くないと考へては居るのてせうけれども、群衆相集つてさうして爭ひの考を煽りますれば、結局手ぶらては濟まぬので、必ずや破壞の運動に移るのてある。それ等の事に於ても私は世界が暗黑だと思ふ、もう少し經濟以上に道德有ることを敎へ、政治以上に宗敎あることを敎へ人を精神的の敎化に導かなければならぬ、この意味に於ては日本の天職は儼然として精神文化を維持して行かなければなるまい。無論それに伴ふては、武力も經濟も、その他あらゆる文明の要素に於て後れを取つてはならぬのは言ふ迄もないことて、問題にする必要もないが、同じやうに西洋と武力を爭ひ、經濟力を爭ふて、それて我國の職分が終る譯のものてはない。今迄の所はさういふ點が却つて遲れて居つたからして、それ等の方面に力を盡しては居るけれども、本來の國家の任務から言へば、それ等の事が完成を告げて、踏まれも蹴られもせなくなつた時、日本は何の爲に活動を起すかと言へば、我國の精神文化を以て世界の人々の心の闇を除いて光を與へ、放浪うて居る者に宅を與へて、精神的にも物質的にも幸福なる生活を遂げしめやうとすることが、日本の國家の存在して居る根本の任務である、そこへ行くまての間には

唯さういふ事を空想的に考へてはならぬからして、大いに經濟力を張り、武備を整へ、さうして實力に於て敗を取らぬやうにするのは無論のことだけれども、それは途中のことである、次第々々に國力が發展をして愈々理想的の仕事が出來得る位地に達したる時、何をするかと言へば、即ち文化的の救濟を世界に與へることである。

所がその事は建國以來定まつて居ることであり、將來の使命として現に吾々の双肩に懸つて居ることでありますが、その大任を完ふするには我國の文化を大成して行かなければならない。それは惟神の教に基いて來る美しいものもあらうし、支那の文明を代表して來た聖賢の教の中にも永遠に保存し且つ發揮しなければならぬものがあらうし、又印度の文明より來る佛陀の教にもあらうから、さういふやうな總ての文明の尊とい方面を幣頓して、これを統一し大成して行かなければならぬ。さうしてその偉大なる思想を本として世界の文化を吸收し同化し、さうして最後は世界的の大文明を日本に打ち樹てゝ世界を指導するを以て、日本人の大志願としなければならない。

それにはそのやうな大理想・大識見を示す者がなければならぬが、その偉大なる文化運動の大先覺者・大指導者・大先生として出現されたのが聖日蓮であります。それは日蓮聖人の理想の上に於てこれを證明することが出來るので、その最も鮮かに現れて居るのは『立正安國論』『開目鈔』等であつて、この兩書に於て之を見ることが出來るのであります。日蓮聖人運動の初めに於て『立正安國論』を作製せられたが、その御趣意の在る所を見ますといふと、日本の國は尋常の國でない、所謂『八萬の國にも超へたる國』であつて、最後は日本の國が世界を照さなければならぬ、日は東より出でて西を照す、その如くに日本の光に依つて世界の暗黑を照すのである。その日本の光とは何であるか、それは日本の文化であらねばならぬ、その文化としては正しき教を打ち樹てなければならぬのであるが、その正しき教とは何ぞ、法華經の大理想を本にして、さうして總ての善良なる文化を統一大成したるものを我國に打ち樹てゝ行かなければなるまい。佛教をやるからといつて、般若心經の『色即是空空々寂々』といふやうな所に落込んだり、聖賢の學をやるからといつて、論語の一節一句に沒頭してしまつたり、惟神の教をやるからといつて狹隘固陋なる頭腦になつてしまつたりして、この文化の大成を妨げる所のものは、皆これ我國に害を與へるものである。

るといふことを日蓮聖人は明かにせられて、その狹隘な誤りに陷つた最も激しい者は法然であると言はれた。その法然を攻擊した論旨も何處にあるかといへば、彼は『撰擇集』を作つて非常に狹隘固陋なる意見を發表した、一向專念といふことを言つて、阿彌陀佛に依る爲に日本の神樣も捨てゝしまへ、釋迦如來も捨てゝしまへといふ、さうして純他力を說くが故に自力の道德をも否定してしまふから、儒教の倫理といふやうなものも要らなくなつてしまふ、唯だ只管に阿彌陀の他力に縋る一つぢやといふやうな主意で佛教を弘めた時、如何に日本の文化が貧弱になり狹隘になつてこの天職を妨げるが判らぬといふ所からして、日蓮聖人は法然を痛擊したものである、その論旨は『安國論』に在つて明白なる所であります。唯だ法然を憎んで感情的に攻擊するといふやうな、そんなものではないのであつて、或る御遺文に依れば、法然等と雖も『智は日月に齊しく、德は四海に滿れり、高僧碩德蘭菊美をたゝかはす』と言つて、その人格を認めて居られるやうな所もあるのである、決して日蓮聖人が人嫌ひをして攻擊されたのではない。自ら任ずる所大にして、どうぞ日本の文化を世界に揮したい、宗旨を開く初めにも房州に於て旭日の昇るのを拜

して「南無妙法蓮華經」と唱へられたが、太陽の光が先づ第一に日本を照す、さうして世界を照す、この通りに日本の光が世界に及んで行かなければならぬといふことを理想して、清澄山頭旭が森に初めて宗旨を開かれたことに考へても、思召のある所は能く判つて居るのである。

さうして之を今日に在つて考へるとどうであるか、斯の如き二大因緣に依つて生れたる聖者日蓮の有難い意味合ひは、今日に於てどういふ關係を有つかと申しますれば、今もこれは同じやうに非常な必要が存して居るのである。佛教は大藏經として一卷も破損せずして我國の經藏にあります、又佛教の宗派は三十七派、八派と分れ、寺は十四・五高をも數へて居るのである、それ故に形からいへば日本の佛教は相當燦んにも見えるけれども、果して現代の人の心の憂みと心の罪とを除いて行く所の、實際の力はどれだけのものかといへば、寔にその形の尨大なるに比しては微力なるものであらうと思ふのである。これはやはり往年日蓮聖人が覺醒を叫んだが如くに、日本佛教の大覺醒を促して、そうして如來の化導を明かにし、佛教の復活を期さなければならぬ、その必要は今も尙ほ昨の如くに現存して居ることゝ信ずるのであります又日本の文化を大成するといふ問題も、今日は却つて思想が紛亂を起して、枝葉の思想と思想に依つて鬪ひを開いて居る、西洋人の言ふ事にした所が僅かの部分の學說を捕へて相互の間に爭つて居る位のことで眞に、「日本はあらゆる東洋の文明の健全なる方面を保持しつゝ世界の文化を吸收して、世界最大の文明を統一大成しなければならぬ」といふ、偉大なる自信力を有つ人は尠ないやうであります。それだけの仕事を爲し遂げるのは將來のことであるけれども先づそれだけの抱負と確信とがなければなるまい、僅かに西洋人の言つた學說の末を趁うてその後塵を拜して居るやうなことであつては、我國の天職を完うすること

は到底出來ないであろう。それには日蓮聖人の抱負、自信を我國の國民に知らしむることは、今も尙ほ昨の如くにその必要は存して居ると思ふのであります。それ故に降誕七百年に方つてこれを慶讃し奉り、その記憶を新たにして、さうして日蓮聖人出現の目的に副ふやうに、吾々門下の者が活動を盛んにするは、當然の事であらうと思ふのであります。

二、教化の中心

次に申述べたいことは日蓮聖人の教化の中心が何れに在るかといふ問題であります。聖人の出現は如來の化導を助けんが爲め、又我國の文化を大成せんが爲めであると致しますれば、その目的を達するには教化事業に基くより外はないのであるが、併しその教化事業の中心は何處に在かれたかといふことを明かにしなければならない。唯が日蓮が偉人だとか、日蓮は剛毅だとか、日蓮に膽力があるとかいふやうな人格だけを語つたのでは、この聖人出現の目的を成就することは出來ない、日蓮聖人は種々なる特色を有つて居るけれども、特に尊といのは彼が人心を教化して行く、その基く所に確固不拔なるものを有つて居つたことであります。

イ、法華經の教義

而して聖人の遺訓に基いてこれを考へますれば、聖人の大識見に映つて居るものは何かといへば、それは、法華經の教義であつて、それを最も從順に遵奉をして、すべて法華經の教義、精神に基いて活動をせ

られて居ることであります。法華經の教義といへば廣いことでありますけれども、その要點を申しますれば法華經の大體の趣意は即ち開顯統一主義でありまして、汎ゆる思想を綜合し開顯して參るので、善きを採り惡きを捨てゝ文化を大成するといふ理想が法華經であります。それは元來釋迦の理想がそこに在つたのである、釋迦は實に大偉人でありまして、小さな宗派を打建てた宗教家ではありませぬ、印度の文化を悉く吸收してさうしてそれを指導しつゝ進んだ、所謂釋迦は文化の開顯指導者である。それ故に釋迦の本懷を留めた法華經はこの釋迦の理想を表して居るのでありますから、全部開顯統一主義になつて居る。第一釋迦自身の教を開顯統一して、初め第一の婆羅奈斯國の說法より、最後跋提河入滅の說法に至るまで、全部に矛盾と衝突の無いやうに、淺深次第を明かに致しまして、如來一代の化導は圓滿珠の如きものであるといふことを說明したものが、法華經である。さうして更に釋迦の教と申すものは唯だ空想を語つたのではなくして、活きたる人生を導き、又宇宙の眞理を教へ、人々の心を說明して行くものであるから、所謂實物に對しての教化であるが故に　釋迦はみづから、我が教の眞實を說くときには世間の道德であらうが哲學であらうが、文化といふものは皆な我が教に調和して說かれたものである、唯だその淺きものには深さを與へ、その狂れるものはこれを直うして行くといふだけであつて、決して世の中の道德であるとか、哲學であるとか、人生のすべての問題と離れて佛教が存するものでないといふ所に、法華一乘の教が示されて居る「一乘」とは釋迦の說く教と世間の文化とが同じ一つの大眞理の下に、調和的に說明されるといふことが、法華一乘の教といふことである。決して社會の文化の外に小さな宗派を立てるものでないといふのが、一乘といふことである。

而して日蓮の教はやはり法華經に基くこと故に、日蓮の主義は小さな佛教の中の一宗派を建設するものでない、故に日蓮は自から

日蓮は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず

といつて、さういふ小さな宗旨、分派の一つの開山などにならうといふ考は有たないといふことを明白に申して居るのである。さうして當時の佛教の情勢が法華經中心の思想を離れてしまつた、最初我國は聖德太子にしても法華經を中心にして一切經を解釋せられたのであるし、傳教大師が出て一層その意味を明かにせられ、最早や日本佛教に於て法華經を中心にすることに異論のあるべきものでない、然るにその後眞言宗興つて大日經が法華經以上のものだと說き、或は念佛宗おこつて阿彌陀經に依つて法華經を侮らしめ阿彌陀經は立派なものではないけれども、やゝ、點に於て法華經よりは宜しいといふ風に言つて、言ひ方はいろ〳〵の事をいふけれども要するに法華經に對する信念を薄らかすやうな事をした。それでは縱し阿彌陀經に依つて救はれるとしても、一方に日本の文化を大成するといふ思想は無くなつて、非常な退嬰的なる、未來的なる、貧弱なる宗教の一角に囚はれて、誰も彼もが鐘を叩いて念佛でも言ふやうなことになつた時、日本の世界に及ぼす天職をどうするかといふ所に、日蓮聖人の頭腦があるから　そこで彼等は破法破國の罪人なり――法を破るのみならず國を破る所の罪人であると論斷されたのである。

左樣にして法華經には一乘の教といふものが本になつて、さうしてその一乘の教の中心に宇宙を說明する場合には「諸法の實相」を說いて、所謂現象即實在の義を示し、決してこの世を夢幻とのみ見ないのである、一つの現象でもその現象に皆な深き意味のあることを根據にして、その大なる點は日本の如き國が

玆に存在して來たといふのは、その存在する所以の天職がある、日蓮が此土に生れたのも唯だ偶然ではない、非常な大きな任務を帶びて此土に生れて居るものであるといふやうに、それ〴〵の人もみなそれ〴〵自覺したならば同じやうに廣大なる意義があるといふことを敎へて行つたのが、法華經の所謂「諸法實相」の敎である。これを消極的に人生は夢だ幻だといつて、般若經などのやうな風に說いて行くと、その國はみな亡びてしまふ、佛敎の弘まつた國が勢力を喪うたといふのも、何も佛敎の眞實を弘めて亡んだのではない、佛敎の消極的なる方面に流れ込んで、一方は般若心經のやうな色即是空空々寂々といふ方に行き、一方は阿彌陀經のやうな厭世悲觀の思想に流れて行けば、それは名は佛敎といつても實は佛敎の本旨に背いて居る敎化であるが故に、その國は亡びざるを得ぬのである、法華經の大精神に基いて敎化を與へた國が亡びたといふ實例は何處にも無い。日本の如きは法華經を盛んに發揮したる時代には益〻その文化が大成されて進んで來た、實は日本の今日の文化の根本に法華經が橫はつて居つたのである。日本の文化史を研究して見ますれば大體は聖德太子に端を發したものである、さうしてその聖德太子の御理想といふものは佛敎に導かれて居る、佛敎の中にも殊に法華經中心の思想で、それに勝鬘經などを附加へて用ひになつて居るけれども、無論勝鬘經と法華經とを比較すれば法華經は根本の思想であるといふことは、問題にするまでもなく聖德太子は御理解になつて居る事である。

いま一つは宗敎といふものには信仰を捧げる本尊がなくてはならぬ、それは法華經の思想では釋迦牟尼佛を顯本して、この一切の敎を說きに出た釋迦がその僧久遠の本佛であることを明かにして參つた、そこに絕對の大人格者を認めそれからして、一切のものを說いて來たそれは所謂統一神敎の理想といつて一つ

の神や佛に囚はれるのでなく、又いろ〳〵の神や佛が秩序を紊してバラ〳〵に勝手々々に働くのではなくして、澤山の佛があり、菩薩があり、神があるけれども、その根本には統一せられたる本佛があつて、さうして天月の萬水に宿つて居るが如くに、非常に廣い範圍に活動を起す所のものであるといふこの思想、これが又如何にも立派な敎義であります。基督敎のやうに獨一神を說いてその働いて出る方の側を認めませんければ、日本の神樣とも衝突し、すべての信仰と衝突しまして、非常に狹隘なるものになるのである又普通の佛敎のやうに澤山の神や佛が分裂を始めますれば、互に相爭うて歸着する所を知らぬやうなことになる。法華經は本佛を顯本してその活動の無限を敎へて居る點に於て、これが日蓮聖人敎化の中心となつて居るのであります。

いま一つは人々の有つて居る佛性開發の敎義であつて、如何なる者でもみな佛性を有つて居る、女であらうが小人であらうが、愚者であらうが、如何なる者と雖も無限の靈光を有たぬ者は一人も無い、「一切衆生悉く佛性を有す」女人成佛あり、惡人成佛あり、二乘の成佛あり、すべてその偉大なる佛性の珠を持つものである。そこに不輕菩薩の禮拜恭敬があつて、日蓮聖人がそれを承け繼いでやられた。これは今の世界に擴がつて居る所のデモクラシーの思想の道德的、健全なる方面と能く一致するものであつて、直ちにそのデモクラシーの思想を經濟上に濫用するとか、或は政治上に濫用するといふことはこれは西洋のやつて居る害毒だけれども、人はみな無限の價値を有するものであるといふ、この人格的なるデモクラシーの思想といふものは無論認めなければならぬもので、それの一番先んじて整うて居るものが法華經の敎義である。基督敎あたりは人はみな罪の子であるといふ所から出發をしたのであつて、佛敎で申しますれば

モウ小乘教の思想のやうな所に引かゝつて居つたものである、法華經のやうに一切衆生みな佛性ありといふことを認め、さうして天に音樂陶え、虛空に華が雨つて來たといふやうな麗かなる所から開けたものではない、蛇に欺されて木の實を食つたからその子孫がみな罪を帶びて居るといふやうな譯で、それから基督が十字架に磔になつて罪の代償をした、けれどもそれも拜まんければその代償の仲間に加へて貰へぬといふやうな、中〻遇難したことである。左樣な事から來てそれで今日はデモクラシーを言ふに至つたけれども、まだ〳〵徹底して居るのではない、唯だ之を經濟的に利益を共通にするとか、生存權をどうするとかいふやうな方の問題からデモクラシーの思想を吐くのであるけれども、菩薩精神、佛陀精神といふ偉大なるものに於て一般に共通して居るといふこの精神から說いて來るといふことは、これは非常に立派なことであります。この意味も日蓮聖人教化の中心になつて居るのであります。

さうしてこの三つが整へられて居る點が有難いと思ふのであります。宇宙を說いて居る者は唯だ宇宙の眞理といふ言葉に引かゝつて、人格の佛樣にまで來ないのが西洋哲學者の通弊である、又神や佛を信ずる者は宇宙の哲學とか眞理とかいふ方は顧みないで、唯だ「何樣が有難い」といふやうな盲目的信仰に流れんとして居るものである。然るに法華經は一方には宇宙に對する所の實相眞理を明かにし、一方には絕對の人格を明かにし、さうして一方には吾々の有つて居る本質——佛性を明かにして、三方面を整頓して之に秩序を與へさうして、理智を以て進むならば哲學の方面で宜しい、又人格の價値を認める點だけに於ては佛性論で宜しいけれども、事實實際吾々が救はれて、吾々の罪とを除いて向上して行く實際の問題に移つたる時如何にするかといへば、これは絕對の本佛を渴仰し、之に對して信仰を捧げて行かぬ限りに於ては、汝の佛性は開發せられないぞといふことを明かにして居るので、非常な道德的のデモクラシーの思想の以上に、本佛の偉大なることを說明して居るのである。今の思想がモツと〳〵進步し終つて、さうして更にそこに絕對の人格を認めることに相成ると思ふのである。それが他の教ではサウ行かない、例へば楞迦經であるとか首楞嚴經であるとかいふやうなお經であれば、佛性論で鼻をついてしまつて佛も忘れてしまふ、禪宗みたやうに佛ナンといふものは認めない、己れに佛性がある、己れ即ち佛であるといふやうな考で、そこで鼻をついてしまふ。又阿彌陀如來を信ずるが爲めに自分に佛性の靈光あることを忘れて、唯ベコ〳〵頭を下げるといふやうな事もいかぬのである。あらゆる點に於て、これは法華經の教義とはいふけれども、實に人心を指導する所の教化の根本が明かになつて居るものである。

この法華經の教義を教化の中心に置いて、さうして前に言ふ一乘開顯の思想から我國のこの文化の大成に向つて進んで參つたのであります。

四、我國文化の正統

我國の文化の正統は何れに在るかといへば、これはやはり聖德太子がその端をお發しなさつたものである。さうして我國の文化は守持すべき所は嚴格に守持するけれども。包容すべき所、攝取すべき所はすべて之を容れて行く、先帝も「知識を世界に求めて大に皇基を振起すべし」と仰せられたが、洵に明白なる事だと思ふ、廣く知識を世界に求めるけれども、根本よりの觀念を維持して行くので所謂和魂漢才といつたり、その他いろ〳〵の言表はし方があるけれども、皆この日本の大事なるものを維持しつゝ廣く文化を

吸收して行くのである。そのやり方は丁度法華經が明かにして居る開顯統一の理想と相合するものであります。

それならば今までの三つの文化に就いて諸人が之を開顯統一する事業を爲し遂げるかといふと、これは論語をやつた者が法華經なり惟神の教を併せる力は出て來ない、又古典を研究して神道の方に入つた人が佛陀の教も聖賢の教も融合するかといふと、これは又固陋貧弱な頭になつてしまふので、共に我國の文化を謬まるものである　儒者が謬まり、神官が誤まる、坊主も誤るけれども、それは般若心經や阿彌陀經に行く者が謬まるのである。眞に開顯統一の理想を明かにして、我國の文化の保存すべきを保存し、開發すべきを開發し、更に吸收すべきを吸收するといふ、この大なる樣度を以て進まんければ、何を以て我國の文化を完成することが出來やうか、出來ないぢやないか。「同じ佛教だから何でも構はぬ、阿彌陀經でも宜い、法華經でも宜い」、「私は好きだから論語をやつて居る」「イヤ僕は古事記だ」……そんな我儘な事ではいくない。我國の天職に省みたる時には、從來の文化を保存して更に偉大なる文化を吸收して、往いては太陽の光が世界を照すが如くに、我が文化を以て世界を照さんければならぬのではないか。その時には日蓮聖人の仰しやるが如くに、聖賢の教はやはり法華經と調和しなければならぬ、惟神の教も法華經と調和しなければならぬ。その代りに法華經を弘める者が又た〻觀念觀法に囚はれて、國家を忘れてしまひ、現實の文化を忘れてしまふやうな事であつてはならない、法華經の正しき理想に依つて日本の文化を融合調和して發達せしめて行かなければならぬ、そこに教化の中心があるのである。

簡單に言へば、「法を知り國を思ふの志」と日蓮が言つて居るが、思想を研究するといふと兎角國を忘れてしまふやうになり、國を大切に思ふ者は思想なんかは輕く視るといふやうなことで今まで來て居る、愛國者は唯だ頑冥にして何でも國でなければいけないといふ國家至上主義であつて、國家の內容が整頓しない。國家の價値はその國家の有つて居る文化に依つて判斷せられんければならぬ。人間の價値もやはりその人の有つて居る思想に依つて判斷せられるのである、その思想に於て泥棒してやらうとか、人の頭をどづいてやらうとかいふやうな事ばかり考へて居つたら、如何に立派な帽子を冠つて居つても、立派な羽織を着て居つても、さつぱり價値が無いものである。人間の價値はその人の內部に包容して居る所の思想に在る、國家の價値もその國が有つて居る所の內部の文化に依つて認めて行かなければならぬと思ふ。この意味に於て國家は先づ以て理想を明かにしなければならぬ、我國は文化を重んじて進んで行かなければならぬといふ事を力說して、さうして命まで懸けて之を爭つたのが日蓮聖人であります。その主張の最も明白なるは、我が神ながらの教から來て居る所の勤王愛國の精神——當時北條は三天皇二皇子を流し奉つて勤王の大義を破つて居る、各宗の坊さんは唯だ教の空虛なるものに囚はれて國家を忘れて居る、勤王の精神を忘れたる北條、愛國の精神を忘れたる佛教徒、左樣な者にこの國を委して置くことは出來ないといつて、北條政府と併せて各宗の坊さんを攻擊したものである。その日蓮聖人の主張は實に鮮なるものであります。

この教、それが宗教でもあり、同時に國家的運動でもあるのであります。日蓮の教の上に於ては何處までが宗教であつて、何處までが國家運動であるといふ區別はないのである、國家それ自身が精神的文化を生命として立つのであります故に、國民みな健全なる宗教を信じて、さうして勤王愛國の精神を確立

し、往いては世界に精神文化を及ぼさうといふ天職を自覺して行くのが、それが一人前の日本人であると日蓮聖人は考へられたのであります。

三、門下の覺醒

そこで次に申述べたいことは門下の覺醒であります。斯の如き偉大なる大聖人を戴いたる日蓮門下の僧俗、各種團體は、この降誕七百年に際して大覺醒をしなければならぬと思ふのである。進んで活動を起すその前に、先づ精神準備として自からの心に反省をして見なければならぬ。

イ、氣宇の局量

その場合に門下を通じての弊害は、第一に氣宇の局量といふことであらうと思ふ。最近は世間の達識の人も段々日蓮崇拜者の中に加はつて來られましたから、大分樣子が變つては參りましたけれども、中古以來の弊風として分派をして、そこに窮屈なる隔壁が出來て、下らない事で相爭ふやうなことになつて參つた、さうして宗派としても非常に微弱なものであり、教義學見といふものから見ても非常に固陋暗愚な狀態になつて居つたと思ふのであります。先輩を一概に罵倒するのは甚だ悪入ることでありますけれども無論その中には除外例の人は多少はありますが、一般を通じての日蓮門下の僧俗を考へますれば、この大目的に依つて出現せられたる日蓮聖人を戴く人達としては、餘りに局量に流れて居ると思ふのである。各派間に存在して居る所の古來の論爭したる書物を見ますれば、その問題の如何にも暗愚であることを證明するに餘りあることでありますが、それは一々この際には申上げませぬ、今も尙ほ殘つて居るのは門下全體に通じての氣宇の局量であります。先づ之を大刷新を致しませんければ、發達すべき時期に於て日蓮主義は思ふやうに發達を遂げないことに相成ります。時至つてこの大主張が擴大せられないといふことの罪は、外に在るにあらずして、これは門下の負ふべきことであらうと思ひます。

ロ、教義の紛亂

その次に反省すべきことは教義の紛亂でありまして、これは舊い時分にも種々なる勝手な事を言うて居りますが、最近一層新研究者が現れて、教義解釋に我儘なる風習が起つて、勝手放題の事を言ふ者が段々出て來て居る。これは日蓮主義の發展に伴ふ所の新弊害として、餘程警戒しなければならない、本當に教義を學ばないで勝手な事を言ふやうな者があります。例へば或る者は日蓮主義は社會主義であるとか、或る者は日蓮は非國家主義であるとか、その他勝手な事を言うて、名を日蓮に籍りて隨分不都合なる思想をも語る人が出來て居るのでありますから、これは此の際互に相警めて、教義の紛亂を愼しむやうに反省を致したいものであると思ひます。

ハ、信仰の低劣

モウ一つは信仰の低劣といふことであります。これは新しく進む人にはこの弊害は餘り認めないのであります、舊來の多數の日蓮信者と申す者、又それ等に附隨して居る僧侶の頭腦といふものは非常に低劣

なもので、第一多數の新興者流などは、法華經の教義の何たるを問ふてもなく、信仰を正すことなくして殆んど天理教や或は大本教と別段違はないやうな事をやつて、さうして迷信的なる低劣なる信仰を鼓吹して居る者が多々存して居ります。その他日蓮門下の各寺院に附隨して居る所の迷信・淫祀に等しい所のものは、これは一時に改めることが出來ないまでも、漸を逐うて覺醒するといふ決心をなさらんければ、それは虚偽であります。日蓮主義を宣傳すると言はれても、自からその内部を淨うすることが出來ないで、この世の中の混亂を覺醒することが出來得るものではありませぬ。他の教團の人達は、その點に於て特にこの降誕七百年を期して一つ大覺醒を希望致したいと思ふのであります。

四、門下の事業

次に申述べたい事は、日蓮門下としての事業であります。この降誕七百年を迎へるに就て、門下の事業として何をやつたら宜しいかといふ事は、これ迄に論議せられて居り、種々なる意見の發表もされて居る今日であります、細かい事はいろ〳〵ありますが、それはこの際申しませぬ。

イ、信仰覺醒運動

第一に爲すべき事業はやはり信仰覺醒運動であらうと思ひます。七百年を迎へたからと言つて、唯だ小湊の誕生寺に大勢の講中が鉢巻をしてワイ〳〵寺詣りをして、何百人行つたとか何千人行つたとかいふやうな事をやつても、それは大した事ではありませぬ、お會式を二度勤めた位の話で、別段大した效果があるものではなからうと思ふ。それよりは信仰覺醒運動を起して、さう面倒な所までは入る事は出來ぬにしても、大體日蓮主義の本領といふものに向つて、信念を喚び醒して來るといふやうにならなければならぬ。先づ演説會などの廣告でも「信仰覺醒」といふ、この覺醒といふ文字を使はぬやうな、却つてワイ〳〵の風を助長するやうな運動をやらうとするならば、それは私共は反對であります。今日はいろ〳〵の意見が出て居りまして、この際活動寫眞を拵へて日蓮聖人を世に知らさうとか、或は芝居をやらして世に紹介しやうとかいふやうな意見もある、それは惡い事ではないけれども、さういふ唯だ低級なる方面に於てのみ今度の運動をやりますといふと、それでなくてさへも好い加減墮落して居る日蓮門下が、寧ろ進歩したる思想家の攻撃目標になるやうな事があつたならば、洵に申譯がないと思ふのであります。故に私は事業の第一はやはり信仰覺醒運動であると思ひます。

ロ　思想善導運動

次には思想善導の運動でなくてはならぬ。日蓮門下が唯だ僅かな信者を殖すとか、或は五重の塔を拵へるといふやうな方面にのみ力を入れて居つては駄目である、日蓮聖人が今日生存してお居でになつたならば、我國の思想界に向つて非常なる御活動を遊ばすことゝ思ふのであります。それ故に門下は暴つてこの我國の思想の惡化、不健全といふ事を撃退する運動に向つて、日も亦足らぬやうに熱心に努力を致すことが、教の爲めにも國の爲めにも御奉公をする所以であらうと思ふのであります。日蓮門下が思想善導の運動を捨てゝ、唯だ團體參詣みたやうなことで、手拭を配つて、ワイ〳〵いふやうな事をやるのは、時代後

れの甚しいもので、最も日蓮聖人に相濟まぬやり方であるといふ事を私は斷言致します。今日はどうしても日蓮主義者としては思想の善導に熱中をしなければならぬ、この際やらぬやうな事ならば、日蓮主義の主張は虚偽である、空論である。

ハ　相互の聯絡運動

次は相互の聯絡運動でありまして、兎角地方などに參りましても、日蓮門下が僅かな事に依つて調和を破つて居ります。それは何の爲めかといふと少しも意味は無いのでありまして、洵に此等局量にして愚なる反目を事として居ります、眞に大聖人の降誕を祝福するならば、僅かな事情の利害などは忘れて、お互ひに力を協せて、所謂「異體同心」の聖訓を遵奉致して大活動を起し、さうして大暴傳道をやらなければならぬと思ふのであります。その點は甚だ望み少ないやうに考へますが、併し理想として申せばそれでありますけれども降誕七百年に對して一般日蓮門下がそれ程覺醒するや否やは疑問でありまして表面だけ醒めたやうな事をいふても、實は眠つて居るのではなからうかと思ふのであります。

ニ　記念事業

次に記念事業として爲すべき事は先づ出版でありませうが、これも古い書物を集めて出版するといふ計畫もあるやうであります、それもマア結構は結構でありますが、古い要らない書物も澤山あることでありますから、それをどうもこの忙がしい際にボツ〳〵出して行きましても、どれだけ日蓮主義の擴大に益するかは疑問であります。故に私が言ふ出版といふのは、この機會にモツと平易簡明にして正義剛直なる所の日蓮の主張を大多數の國民に知らすべく、即刻讀んで感動感激を惹くやうなる出版物を、成るべく澤山に多數民衆の手に與へる事をこの記念事業としてやりたいと考へるのであります。

今一つは何か記念の建築でもしたら宜いのでありませうが、それに就ては東京に日蓮主義の聯合の大會堂でも建てたら宜いと思ひます、今頃片瀬の龍口寺に五重の塔を建てたり何處かに大きな仁王門を建てるといつて金を使つて居りますけれども、これ皆暗愚なるやり方であります。左樣な者は皆地獄に行く人達だと思ふ、必要なる運動をしないで無駄な事をして居る者は、罪になつても利益にはならぬといふ事を日蓮聖人は盛んに說いて居ります。さうてありませう、國家が非常な大事な秋に於て、その必要なる方面の事をしないで不必要なる事をして居るといふ事になりますれば、これは全く害物であります、今頃五重の塔を修繕するからと言つて十五萬圓を使つたとか仁王門の建築に何萬圓使つたとか、身延でも今度何か建築をやるさうてありますが、唯だ「伽藍佛法」と申して大きな不用な建物を造つて實際人心感化の事業を忘れて居るのが、日本佛教の頽廢を致した原因であります。必要なる建造物は無論大事でありますけれども不用なる物を宗教信仰の名に依つて造るなどといふ事は永遠に有害無益なる事であります。それ故に東京の中心に理想的なる活動の本舞臺を造つたら宜からうと思ひますが、併し中〻さういふ仕事はちよつと出來ないだらうと思ひます。日蓮門下にその力が無いのではありませぬ、やはり寢惚氣た者が多いからであります。醒めさへすれば直ぐ出來る事であります。故にどうしてもやはり覺醒運動が何よりも大事であります。

五　統一團の覺悟

最後に申述べたい事は統一團としての覺悟でありまして、他樣はどういふ事をなさつても、それはマア已むを得ませぬが、吾々統一團員は上來述べ來つた意味に於てこの降誕七百年に對する相當なる活動を致したいと考へて居ります。東京を始めとして全國有數なる都會に向つて、本年は相當なる活動をやつて見たいと考へて居る、即ち信仰の覺醒運動、思想善導の運動、相互の聯絡運動それから、記念出版、又建築の方は別段大きな物は拵へませぬけれども本年に於て二三の記念建築物も出來るかと考へて居ります。それ等の細かい事は玆に申述ぶる必要もありませぬが、必ずや誓つて大正十年のこの一年には、統一團としては相當なる效果を日蓮主義發展の上に捧げたいと決心を致して居ります。

南無妙法蓮華經

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初歩　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用　金壹圓八拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　卷一、二、三、四、五、壹部金貳圓貳拾錢　卷六、壹部金參圓
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金拾八錢　送料一部金參圓四拾錢
○大藏經要義　一部金參圓十八拾錢　送料一部金十八錢　十一卷近既刊　送料不要
○法華經要文　上製金參拾錢　上製金五拾錢　送料一部金貳錢

○思想の惡化善化
○人類文明の基礎
○正しき理解と信念
○日經上人の功勳

各一部金六錢百部以上金五錢の割　送料一部金貳錢

一部金十錢郵稅金五厘

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川町妙國寺內

大藏經要義刊行會

振替東京二一五九六番

統一定價

一冊	金參拾錢
一ヶ年	金參圓參拾錢

送料一錢
送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

前金の事

本誌に限り一部定價金十錢郵稅金五厘百部以上二割引施本用に御使用の方には三割引○送料實費

大正十年二月七日印刷納本
大正十年二月十日發行（第三百十三號）

不許複製

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　鈴木日雄

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所　三秀舍

名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺內
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

編輯所　統一編輯所

目次

思想戰の意義（法輪）……本多日生
一、緒言…二、本實上の教訓…三、秩序の效實…四、思想の惡化…五、危險思想の恐るべき所以…六、危險思想の防止（其一）…七、危險思想の防止（其二）…八、危險思想の傳播…九、言論自由の誤解
聖德太子の雲法に就て……本多日生
佛教信仰の正統……本多日生
佛法の奈處……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日咸
宗門史料……山根青村
生活の問題より生命の問題へ……中川日史
改造運動と信仰……武田顯龍
年頭の願望……熊井本光
維摩の娘……野村香明子
記事、報道十數件

第廿五年一月號